九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

王運熙・楊明《隋唐五代文学批評史》第二編 : 《唐代中期の文学批評・緒論》訳注(下) : 唐中期の文論

甲斐, 勝二
福岡大学人文学部 : 教授

東, 英寿
九州大学文学部 : 教授

https://hdl.handle.net/2324/19717

出版情報 : 福岡大学人文論叢. 41 (4), pp.1609-1626, 2010-03. 福岡大学研究推進部
バージョン :
権利関係 :

（資料）
王運熙・楊明《隋唐五代文学批評史》第二編

《唐代中期の文学批評・緒論》訳注（下）

— 唐中期の文論 —

甲　斐　勝　二*
東　　英　寿**

翻訳にあたって

王運熙・楊明著《隋唐五代文学批評史》[1] の第二篇唐代中期文学批評第一章緒論は、「盛唐の詩論」、「中唐の詩論」、「唐中期の文論」の三部分から構成されており、「盛唐の詩論」部分はすでに「《唐代中期の文学批評・緒論》訳注（上）」（福岡大学人文論叢第 40 巻第 3 号、2008 年 3 月）、「中唐の詩論」部分は「《唐代中期の文学批評・緒論》訳注（中）」（福岡大学人文論叢第 41 巻第 1 号、2009 年 6 月）として訳出したので、今回は「唐中期の文論」部分を取り上げる。

唐中期の文論といえば、所謂「唐代古文運動」を論じることが中心となるが、中国文学史における「古文運動」という語句の使用については、注釈者（東）は違和感を持っており、そのことについてかつて拙著『歐陽脩古文研究』（汲古書院、2003 年）序説 5 頁～18 頁で論じたことがある。問題の要点は「古文運動」という概念が、いつ生まれたのかということであり、そのことについて拙著の中で羅聯添氏の「論唐代古文運動」（台湾学生書局『唐代文学論集』所収、1989 年）を引用して以下のように記載した。

---

* 福岡大学人文学部教授
**九州大学教授
[1] 《 》は、書名や篇名などを示す現代中国語での書名符号。翻訳の文章では日本の通例にならい書名は『』とし，篇名は「」で示している。

「古文運動」という概念がいつ生まれてきたのかということについて考えてみたい。その際、大いに参考になるのが羅聯添氏の「論唐代古文運動」における次の指摘である。

至「古文運動」名称，清代以前不曾有。所謂運動，必有一個団体作有計画的種種活動，如文字、口頭宣伝等。唐代古文家対古文只是個別倡導而已，頂多有若干人響応附和，実在不成什麼運動。「古文運動」是近代人受時風潮流的影響而産生的一個名詞。中国文学史上，最先用「運動」這個名詞的是民国十七年（一九二八年）出版的胡適「白話文学史」。……三年後，到民国二十年（一九三一年）胡雲翼「中国文学史」第十一章標題是「唐代的文学運動」，称「古文運動有韓柳二氏的努力而達於最高的発展」。到民国二十一年（一九三二年）鄭振鐸「中国文学史」第二十八章以「古文運動」為題，討論唐代「古文運動」的発展与成就，此後「古文運動」成為一個普遍使用的名称。

「古文運動」の名称に至っては、清代以前にはなかった。所謂運動は必ず一個の団体が計画を立てて行う種種の活動である。たとえば、文字や口頭による宣伝などである。唐代古文家は、古文に対して僅かに個別に唱え導くだけで、せいぜい若干の人が呼応追従したに過ぎず、実際はいかなる運動ともならなかった。「古文運動」は近代人が当時の風潮の影響を受けて作り出した一個の名詞である。中国文学史上、最も早く「運動」という名詞を用いたのは、民国十七年（一九二八年）出版の胡適「白話文学史」である。……三年後、民国二十年（一九三一年）の胡雲翼「中国文学史」第十一章の標題は「唐代的文学運動」であり、「古文運動は韓柳二氏の努力によって、最高の発展を成し遂げた」と称す。民国二十一年（一九三二年）に鄭振鐸が「中国文学史」第二十八章に「古文運動」を以てタイトルとし、唐代の「古文運動」の発展と成就を討論するに到り、この後「古文運動」は一個の普遍的に使用される名称となった。

「古文運動」という名称は、一九二八年の胡適の文学史の中で初めて登場してくる。その影響を受けた胡雲翼や鄭振鐸の中国文学史に用いられ、以後文学史に定着する。

胡適は一九一五年九月の『新青年』創刊に始まる五四の新文化運動を推進した人物で、当時は政治が文明全体の変革を求める以上、文明の中心的地位を占める文学と政治は密接不可分の関係であった。胡適以外にも陳独秀等の主張が政治に影響を与え、実際に運動が展開されていた。特に胡適は、清末に米国に留学して在米中に『新青年』に寄稿し、新文学は白話文・口語文で書かれるべしという口語文運動を実践していたのである。そうした趨勢の中で、胡適が中国の古典を振り返って、「古文運動」という概念を構築したことになる。そして、彼が提出した「古文運動」という名称は、以後各種の文学史に取り入れられ一気に定着してしまう。

つまり、「古文運動」という名称は、韓愈や歐陽脩をはじめとする唐宋の古文家とは関係がないのである。羅聯添氏がいう様に、運動とは団体が計画を立てて行う種々の活動であるので、唐宋時代にそうした運動はなかったことは明らかであろう。ところが、当時の実態を詳しく検討することなく、「古文運動」という語句が文学史を把握する上で、これまで決まり文句の如く用いられてきた。ここに、「古文運動」という名称の持つ錯覚が生まれることとなった。

以上のように拙著では記述した。この見解について、最近、馮志弘氏が『北宋古文運動的形成』（上海古籍出版社、2009 年）の中で、以下のように記述する。

也有学者主張用“古文復興”、“詩文革新”的称謂。例如日本東英寿先生認為以“運動”一詞命名古文変革是現代学者的観念，這個概念容易做成対於古代文学現象的誤解。本書認為，東英寿先生的説法旨在辨清“運動”的概念，這個思路誠然合理；随著研究的愈趨深入，這種誤解已経愈来愈少見。実際上八十年代中期以後学者也対古文“運動”的内涵及義界做了很細緻的工作。另一方面，由於“古文運動”，或者“新楽府運動”等説法已経十分普遍，雖然也有学者提出不同的看法，但総的来説並未動揺学術界的成説。因此本書仍然採用“古文運動”之説。（同書 2 頁、注①の記述）

またある学者は、“古文復興”、“詩文革新”の呼称を用いることを主張する。たとえば日本の東英寿氏は“運動”という言葉で古文変革を名づけることは現代の学者の観念であり、この概念は古代の文学現象の誤解をまねきやすいと考えている。

東英寿氏の見解は“運動”という概念をはっきりさせることであり、この考え方の方向は誠に合理的であると本書は考える。研究がますます深く向かうに随って、この種の誤解はすでに少なくなってきている。実際上、八十年代中期以後、学者も古文の“運動”に対する内包及び義界について非常に細かな仕事をした。また一方では、“古文運動”、あるいは“新楽府運動”等の言い方は、すでに十分に普遍的であり、ある学者は違う見方も出しているけれども、総じていえば決していまだ学術界を動かす説にはなっていない。このため、本書ではやはり“古文運動”という言い方を採用する。

確かに、馮志弘氏がいうように、「古文運動」という語句は、現在の中国文学史の記述においてしばしば使用され、普遍的に用いられているのは事実である。それが学術界の定説になっているのも事実である。ただ、私が主張しているのは、韓愈や柳宗元在世当時、彼らが自らの試みを「古文運動」と呼んだ事実はなく、「古文運動」という語句自体、韓愈や柳宗元と何ら関係していないということである。したがって、何の規定もなく「古文運動」という語句を用いると、近代人のいう「運動」を意識してしまい、誤解するということである。その例としてたとえば、中唐の韓愈や柳宗元の古文復興の試みの源流を、初唐の陳子昂に求める説があげられる（原書 194～195 頁参照）。それは陳子昂に古文の作品があるので、それをそのまま中唐の古文と結びつけ、韓愈や柳宗元の古文復興の源流と考えるものである。近人の銭冬父『唐宋古文運動』（上海古籍出版社、1962 年 10 頁では「七世紀末、武則天在位的時候、一個宏亮的要求文学改革的声音响起来了。梓州射洪（今属四川）人陳子昂（661－702、字伯玉、唐代文学革新的先駆者）発出了有力的文学革命的信号、他的那篇《与東方左史虬修竹篇序》被認為是唐代文学革命運動的重要宣言」と記述し、陳子昂が「与東方左史虬修竹篇序」を書いたことが、唐代文学革命運動の重要な宣言だと指摘する。しかし、この作品を書いたことがどのような「運動」のいかなる宣言だというのであろうか。本書において、楊明氏が指摘するように、初唐の古文は中唐からの古文復興とは質的に全く異なるものである（原書 195 頁参照）。銭冬父氏は、韓愈や柳宗元より先に古文の作品を陳子昂が書いているという事実に注目し、「運動」の源流を陳子昂に求めた。つまり、何の規定もなく「運動」という語句を用いたことにより、初唐と中唐の古文は質的に違うという当時の実態に目を向けることなく、その語に引かれて陳子昂を中唐の「古文運動」の源流としてしまっている

のだ。このように「運動」という語句に何の規定もせずに安易に使用すると、「運動」という語句が一人歩きしてしまい、何かそのようなものがあるかの如き錯覚をして当時の実情に蓋をしてしまうので、慎重に用いるべきであると私はいいたいのである。

ただ、唐代中期に古文が広まったのは事実である。それを「古文運動」という語句で説明するのであるなら、韓愈や柳宗元在世当時、彼らがそうした試みを「古文運動」と呼んだ事実はないが、事実がないということを前提とした上で、韓愈らの試みを後世の我々が便宜上「古文運動」という語句を使用して説明したとあらかじめ規定しておくべきであろう。

韓愈らの古文復興の試みが今日まで注目されるのは、本書において楊明氏が指摘するように「所謂「古文」、其實是新創之文」ということがあげられる（本書 199 頁参照）。「古文復興運動」という言葉には「古文」という語句があり、「復興」とは「古文」に復興する、つまり古文へ回帰するということなので、先秦や漢代の古文に復帰することと考えてしまうが、ただ単に先秦や漢代の文章に復帰するだけでは、おそらく中唐の古文復興は広まることはなかったと思われる。韓愈や柳宗元は漢以前の文章に範を求めつつも、発想や語彙に中唐の社会に適応する要素を取り入れて、所謂新しい散文（＝古文）を創出したといってよい。本書で楊明氏が指摘するように、中唐の古文は、題材、表現規範、芸術技巧、語用運用などの方面において先秦、漢代の文章よりも大きな進歩、発展があったのである（原書 199 頁参照）。

ただ、韓愈や柳宗元らの試みは、その後急速に衰えてしまい、古文の復興は、結局北宋の歐陽脩らの登場を待たねばならない。したがって、前述した羅聯添氏は「唐代古文家は、古文に対して僅かに個別に唱え導くだけで、せいぜい若干の人が呼応追従したに過ぎず、実際はいかなる運動ともならなかった」と結論づける。しかも、韓愈らに呼応した文人らの中から、樊宗師のような「奇」を重んずる人々が出てきた。こうした「奇」を重んじる文章の特色は、後の宋代になると顕著に表れてくる。宋代の古文家は韓愈のような古文を志向したが、その一部は次第に樊宗師のような韓愈の賛同者達の「奇」の要素を色濃く取り入れ、古文を作成し始めたのである。彼らは自己の文章に「奇」を重んじ、「険怪」や「新奇」と評される古文を作成した。それが大きな勢力になったのが北宋の仁宗朝頃に流行した「太学体」といわれる文体である。「太学体」は古文に属すが、その特色は「険怪」、「険怪奇渋」、「新奇」、「怪僻」等で表される。嘉祐 2 年（1057）の科挙において、そうした「太学体」の古文で書かれた答案を斥け、明快達意の古文で

書かれた答案を合格させたのが、この科挙の権知貢挙・歐陽脩（1007～1072）であった。これによって、以後明快達意の古文が主流となるのである。なお、古文の大家である歐陽脩が斥けた文章が「太学体」なので、しばしば「太学体」は駢文であると誤解されることがある。「太学体」が駢文ではなく、「奇」を重んじた古文であることについては、注釈者（東）の拙稿「「太学体」考—その北宋古文運動に於ける一考察—」（『日本中国学会報』第40集、1988年）を参照されたい。

本訳注は、東と甲斐が定期的に行っている文学批評の研究会の成果である。東が下訳を作り、甲斐が注を施した[2]。注釈に示す原文は本書引用文に基づき、気づいた異同があればそこに記した。「翻訳にあたって」は東が担当した。翻訳や訳注の方法も含めてご批正をお待ちします。

[2] 訳文は二人で検討し、注釈は，これまでの方針に従い、原文著者の意図に従ってつけている。

《唐代中期の文学批評・緒論》訳注（下）
—唐中期の文論—

先秦両漢の散文から、斉梁、初唐の典型的な駢文に発展するまで、非常に長い時期が経過している。その一方、駢文から中唐の韓愈、柳宗元などの「古文」に至るまでも相当長い発展の過程がある。この過程の中で関連する文学理論を分析すると、中唐「古文運動」[3] が興ったこと、実にそれが必然であった原因がわかる。

まず、駢文は極点までに発展してしまい、作者は対偶、詞藻の美しさ、典拠と声律に拘泥し、政治と社会生活の中で用いる実用的な文章でさえも、しばしばきらびやかで彩色あふれんばかりに書いたのだ。これでは一部の人からの非難を引き起こしてしまう。西魏の時、蘇綽[4] はかつて「近年より、文章は華靡で、江東に及んでは、いよいよ軽薄なありさまだ（近代已來，文章華靡，逮於江左，彌復輕薄）」（『北史』「柳慶伝」）と批判し、復古を求めていた。しかし、蘇綽などは駢文が華靡すぎるのは文章を書く角度からいかなる不利があるのかというところまでは指摘できなかった。彼らの復古の要求は、政治の改革とかなりの程度歩調を合わせ、強引に周代の制度を拠り所としようとしたところから出ている。それ故その文章の制作では『尚書』を模倣したものの、逆に一層時用にそぐわず、当然ながら成功を収めるはずはなかった。隋の文帝の時に到って、文章の華艶を禁止する命令が下された[5]。その中には、実用的な公の文章を書きやすく、読みやすくさせる目的が含まれていたのである。唐初の魏徴『隋書』「文学伝序」は北朝文学を論ずるとき、その「気質を重んずる」、「理が詞藻よりもまさる」、「時用に便利である」という点を評価した[6]。華艶な文風を直接に非難したわけではないけれども、実際には素朴な文辞で実用的な文章を書く思想を初めて示すものであった。魏徴本人の上奏文、論議などはすなわちそのようであり、全体的にはまだ対句主体の文体であるけれ

---

[3] 「古文運動」については翻訳前書き参照

[4] 蘇綽（498-546）字令綽、武功（今の陝西）の人。『魏晋南北朝文学批評史』第五章北朝文学批評 p580～参照。その発言は南朝の華美な文体模倣への批判からくるが、この批判は文章ばかりでなく社会批判も兼ねていたであろうと推測されている。

[5] 『隋書』「文學傳」：“高祖（文帝）初統萬機，每念斲彫為僕。發號施令,咸去浮華” とある。

[6] この部分は、原書『隋唐五代文學批評史』p53 参照。『隋書』「文學傳」：“彼此好尚,互有異同。江左宮商發越,貴於清綺;河朔詞義貞剛,重乎氣質。氣質則理勝其詞,清綺則文過其意。理深者便於時用,文華者宜於詠歌。”　江左は南朝、河朔は北朝を指す。

争[16]が生じてさらに激化し、宦官は権力をほしいままにしていた）を回避する消極的な態度を表すものだった。

白居易にはさらに感傷詩がある。「與元九書」ではその詩類の内容の特徴は「外界の事物に触発され、感情が中で動き、感じたまま触れたままに嘆き詠じたもの（事物牽於外、情理動於内、隨感遇而形於歎詠者）」であり、「序洛詩」の中では、さらに古代以来の詩人の篇章が十中八九「憤憂怨傷の作」であると白居易は指摘する。つまり、詩人たちが「讒言寃罪での放逐、国境警備や旅、凍え、餒え、病気、老い、生死や別離（讒言譴逐、征戍行旅、凍餒病老、存歿別離）」などのような不幸な巡り合わせの中にあって、生まれたものだというのだ。これは、詩人達に憤怒、憂鬱、怨恨、感傷の気持ちを表現する篇章の数量が極めて多いことを物語るものなのだ。「序洛詩」は、さらにこのような詩篇が非常に多いというところから、世間に広く伝わる「文士には数奇な運命が多く、詩人は幸運に恵まれない者が多い（文士多數奇、詩人多命薄）」という思いを証明したものだ。これに先立ち、杜甫にすでに「文章は人の命運が上がることを憎むかのよう（文章憎命達）」（「天末懐李白」）の句があり、詩人薄命という思いは、唐代の社会で相当流行っていたのが分かる。

韓愈[17]（767～824）はこの方面について白居易と相い通じ合う理論を明らかにしている。「送孟東野序」[18]の中で、韓愈は人々が外界の事物から触発を受け、揺れ動いて平穏ならざる思想感情が生まれ、それゆえにさまざまな著作と文学作品が生まれるのだ、これこそが即ち平らかならざれば鳴るということなのだと指摘する。平らかならざる感情には悲しみも楽しみもあるけれども、孟郊の境遇へと結びつけ、悲しみ愁える側へと立つ、いわゆる「その身を窮乏させ、飢えさせて、その心を憂愁させ、自分の不幸の音を立てさせる（窮餓其身、思愁其心腸、而使自鳴其不幸）」というものだ。「荊潭唱和詩序」の中では、韓愈は「およそ、和平の音調は淡薄であり、憂愁の詩歌は精妙で、歓喜の辞句はうまく表現しにくく、困苦の言語は上手に言いやすい（和平之音淡薄、而愁思之聲要妙、歡愉之辭難工、而窮苦之言易好）」とさらに明確に指摘する。この見方は、

---

[16] 牛李の党争：牛僧孺（780～848）と李徳裕（787～850）をそれぞれ盟主とする政治闘争。白居易の詩文の中にはそれぞれへの詩文が残り、どちらとも交友があったことが分かる。
[17] 韓愈：本書第二篇第四章中唐古文作者及其先駆的文学批評第四節韓愈、にて詳論。
[18] 「送孟東野序」：友人の孟郊（751～814）が貞元17年（801）に江蘇の溧陽に赴任する折のもの。孟郊は韓愈に並ぶ詩人だったが、終生の困窮で知られる。訳文は筑摩書房世界古典文学全集『韓愈』（清水茂訳）を参照、以下同じ。

しかし、この質朴を要求する思想は、古文運動の形成、発展の歴史の過程を研究する時、やはり重視すべき価値はある。なぜなら、一種の審美趣味の形成や変化は、しばしば実用の目的から出発し、長く複雑な過程を経過して、ようやくできあがってくるものだからだ。駢文がまさに盛んである時期、大多数の作者は構想、運筆の時、自覚のあるなしに関わらず、その四言一句または六言一句による対句、華麗藻飾の言語形式に束縛され、筆を執るやもうその枠にはいって抜け出すことは難しかったのである。文章に質朴を求める考え方は、自覚的な審美の目的から出発したのではないけれども、その無形の束縛を日一日と緩ませ、作者の中には駢文の音律の美に次第に飽きてきたり、また新しい言語の形式を用いて芸術上の探索をするものも現れた。さらに、初唐に求められた文章は質朴であるべしという主張は、まだ明確に駢偶に反対してはいなかったが、美しさに凝ることにはすでに反対していたし、その作者達はすでに対偶の形式主義を重視していない。対偶でもよいし対偶でなくてもよい、全て対句でもよいし半分対句でもよかったのである。こうして、かかる主張は駢文体から散文体に変わっていく契機となった。事実上、上文で述べたように、駢文から散文に変わるのは、ちょうど散文から駢偶に変わったと同様に、次第に変化してきた過程なのだ。典型的な駢文や典型的な散行の文句には、大量の駢文体と散文体が入り混じって、あるものは駢体に傾き、あるものは散体に傾く、時には駢か散か判定できない文章になることもあった。すなわち、陳子昂が書いたような質朴な論議表疏についていえば、偶句がすでに無くなるか、あるいは非常に少なくなってはいても、句の形式の方はまだきちんと整って四言句が多く、その文体は中唐の「古文」[10] とずいぶん違っている。このような作品は駢体から散体に変わる過程のある段階を代表するものだと見なしてよい。

これを要するに、文章を質朴にして、実用に役立てるという観点は、古文運動の勃興とある程度の関連があったのだ。事実上、中唐古文運動の各作者及びその先駆者が文章に「道を宏める」、「道を明らかにする」[11] ことを求めるのは、やはり文章を工具だと見なす実用的な観点による。文章で道義を宣揚しようとすれば、散体の文章は自から駢儷の文体より便利だからである。

次に、文章で道義を伝えようとする観点は、すでにより普遍的な思潮を形成していて、散文を以て駢文に変わる過程を大いに後押しした。つとに天宝年間、一部分の人は社会

---

[10] 中唐の「古文」：「古文」の語の関しては前書き参照。
[11] 「宏道」、「明道」：以下獨孤及・柳冕の注参照。

状況、士人の気風に非常に不満を示している。たとえば、蕭穎士[12]の場合、読書人を「風雅の品行を大いに欠き」、売名行為をし、利益と官禄をみだりに追求する（彼の「贈韋司業書」に見える）と非難していた。安史の乱の後、論者は教訓を総括し、天下が大混乱となった理由が、風習の衰え、教化の廃れと密接な関係があると判断した。たとえば李華[13]は「開元、天宝の間、……教化が流動不定で一般的となってしまった、だから道を体現する人は少ない」（「楊騎曹集序」）といい、賈至[14]は「士人は気風や教化と最も関係を持つ」、士人の気風が腐敗し、そこで「禄山が一声叫べば、四海は動揺し、史思明が反乱を起こせば、十年を経ても回復できないありさま」（「議楊綰條奏貢挙疏」）となったという。気風が腐敗した理由については、士人がまじめに経典を勉強しなかったので、儒家教義による社会維持の力が薄弱になってしまったことによると彼らは考えた。それ故、社会を治療し救う彼らの処方箋は、強力に儒家の道を習い、宣揚することになる。したがって、当然まず『五経』を習い、その次は『孟子』、『荀子』などの儒家の著述[15]を学ばねばならない。また漢代は儒教を尊崇した時代だったから、そのころの著述も思想内容がかなり純粋だとみなされた。たとえば賈誼、董仲舒、劉向などの人の議論文、司馬遷、班固の歴史著作は[16]、全て称賛されたのである。魏晋以後は、彼らからすると、衰えて混乱した時世であり、その文章著述は彼らにとっては思想的価値は低く、儒教に背くとみなされるときもあって、当然ながら敬い見習うような対象ではなかった。一方、文体の変遷の歴史からいえば、漢以前の文章にはより質朴な散文体の文がたくさんあり、魏晋以後からは駢儷体の文が日増しに発展し、文章の気風が日一日と華美

---

12) 蕭穎士（約717-760）：開元23年の進士。「贈韋司業書」：“竊觀今之文人,雅操大缺。内心不能自強於己,外有一求譽於時”とある。原書第二篇第四章第一節（p439）にて詳論。

13) 李華（約715-774）：開元23年の進士。「楊騎曹集序」：“開元、天寶之間，海内和平,君子得從容於學,以是詞人材碩者眾。然將相屬非其人,化流於苟進成俗,故體道者寡矣。”とある。原書第二篇第四章第一節（p443）にて詳論。

14) 賈至（718-772）：開元23年の進士。「議楊綰條奏貢舉疏」：“今取士試之小道,而不以遠者大者,使干祿之徒,趣於末術,是誘道之差也。……四人之業,士最關於風化,近代趨仕,靡然同風,致使祿山一呼而四海震蕩,思明再亂而十年不復。”（全唐文卷368）。原書第二篇第四章第一節（p448）にて詳論

15) 著述：原文は子書。隋書経籍志の四部分類によれば、経学類の他に、各種の思想的な書籍が子書類として一類をなす。ここには『孟子』や『荀子』などの儒家類の書籍も含まれる。

16) 賈誼、董仲舒、劉向、司馬遷、班固：これに加えて本文以下に現れる楊雄などはそれぞれ前漢の文章家として著名な存在。本中国文学批評通史系列『先秦両漢文学批評史』第二編両漢文学批評にてそれぞれ詳論あり。

に向かってきている。それ故、先の論者達は文章と道の関係において、文章に「道を宏げる」（独孤及「蕭府君文章集録序」[17]）、「道に本づく」（梁蕭「補闕李君前集序」[18]）、「道を行う」（柳冕「答楊中丞論文書」[19]）ことを要求しているのだから、言語の形式上においても、質朴と散体を要求して、駢体には反対すること、これはきわめて自然なこととなる。もし、初唐の文章では気風の質朴さを要求した論者もまだ駢体への反対を示さなかったというのならば、天宝以来の論者はすでにかなり鮮明にこの点を言い出している。たとえば、蕭穎士は「局夫が儷偶」（「江有帰舟詩序」）に反対し、独孤及は「儷偶の章句」「八病四声」を文章が「大きく崩壊した」現れだと見なしていた（「趙郡李公中集序」）[20]。これを要するに、思想内容と言語の両方面で、彼らはともに復古を求めたが、それは先秦と漢代に学ぶことに他ならなかったのである。

これらの論者が駢文に反対する理由は、当時の科挙試験で文章を書く際、駢体を用いることとも関係がある。初唐以来、文章で人材を選ぶことを非難する人が途切れず出た。文章の復古を主張する論者達には、この試験制度が読書人をして文章の研鑽はさせるものの、儒家の学術は放棄させてしまい、読書人に自画自賛させてよけいな競争をさせ、気風が腐敗すると考えるものもいる。彼らは華麗な駢文は、ただ科挙受験生達が文才をひけらかすものにすぎず、それを通して人物の識見や道徳を判断することはできるものではないと考えていたのだ。したがって、彼らはこの制度に反対し、この制度で使われている文体をひどく嫌ったのである。

上述した文章に「宏道」、「行道」を求める観点は、古文運動の先駆者の蕭穎士、李華、賈至、獨弧及、梁粛、柳冕等によって提出されたものである。古文運動の主将たる韓

---

[17] 独孤及（725-777）：「蕭府君文章集録序」：“君子修其辭,立其誠,生以比興宏道,歿以述作垂裕,此之謂不朽。”ここでいう「以比興宏道」は詩経の精神で儒経を広めること。原書第二篇第四章第一節（p450）にて詳論。

[18] 梁蕭（753-793）：「補闕李君前集序」：“文之作,上之所以發揚道德,正性命之記……故文本於道,失道則博之以氣,氣不足則飾之以辭。”原書第二篇第四章第一節（p457）にて詳論。

[19] 柳冕（?-?）：「答楊中丞論文書」：“夫君子學文,所以行道.足下兄弟,今之才子,官雖不薄,道則未行,亦有才者之病。”原書第二篇第四章第二節（p468）にて詳論

[20] 蕭穎士「江有歸舟」：“文也者,非云尚形似,牽比類,以局夫儷偶,放於奇靡。其於言也,必淺而乖矣。所務乎激揚雅訓,彰宣事實而已。”
独孤及「趙郡李公中集序」：“其風流蕩而不返,乃至有飾其詞而遺其意者。則潤色愈工,其實愈喪。及其大壞,儷偶章句, 使枝對葉比,以八病四聲為梏拲,拳拳受之,如奉法令。”なお、「儷偶の章句」は対を頻繁に用いる表現をさし、「八病四声」は文中の音律規則をさす。ともに駢儷文の特徴を代表するもの。

愈[21]、柳宗元[22]は、文と道の関係や駢文体への反対などの問題に関しては、彼らの見方を受け継いでいるが、しかし違うところもあった。その相違は主に二つある。一つは、先駆者達が「道」に言及する時、比較的漠然としていたが、韓、柳らはともに実際に政治の争いに深く関わった人物であり、彼らが「道」に論及する時は、現実の政治、社会生活とのつながりがかなり密接で、内容も比較的充実している。したがって、彼らが主張する「文は以て道を明らかにする」というものは、かなりの程度において文章に現実の意義との密接な繋りを要求するものであって、これがますます古文運動の発展を有利に導いたこと。二つには、先駆者達には多かれ少なかれ「宏道」「行道」を文学の審美機能と対立させる傾向があるので、その言論はしばしば狭隘で形式的に見える。韓愈、柳宗元となると全く違うことだ。たとえば、先駆者達は文章を政治教化の工具と見なしたが、韓、柳は文を以て道を明らかにすると強調する以外に、古文の創作でも憂鬱を解消でき、自らも楽しみ、人も楽しむ[23]と述べていたのである。また、先駆者が歴代の文學の発展を評論する時には、魏晉以後の詩文をおとしめるばかりではなく、甚だしくは『楚辭』さえ否定する意見もあった。考えるに、南朝の裴子野[24]にもすでに『楚辭』を見くびる意見があった。唐代になり、屈原、宋玉を見くびる語は王勃[25]、盧蔵用[26]から発せられ始めた。張九齢[27]はかつて『騒』辭が「大雅というに匪ず」(「陪王司馬宴王少府東閣序」)といったし、李白も「正聲は何とも微茫となり、哀怨は騒人より起こる」

---

[21] 韓愈(768-824):若いときに古文の先駆者とされる蕭頴士の子蕭存に可愛がられ、梁肅に認められる。中唐を代表する詩文家で、駢儷文のスタイルを用いずに「古文」でその名をはせた。原書第二篇第四章第三節に詳論(p486)。

[22] 柳宗元(773-819):21歳で進士及第。監察御史裏行の職で韓愈と同僚となる。韓愈とともに中唐文体改革の指導的人物。原書第二篇第四章第三節(p525)に詳論。

[23] 韓愈については原書第二篇第四章第三節三「以文舒憂和以文為戯,不平則鳴和窮苦之言易好」(p506)参照。柳宗元については原書第二篇第四章第三節三「談詩文的舒洩自慰、審美愉悦作用」(p536)に詳論。

[24] 裴子野(469-530):南朝の文学論で保守的な主張で知られる。歴史家の一族として知られる。彼の「雕蟲論」には"若夫悱惻芬芳,《楚騒》為之祖。靡漫容與,相如扣其音。由是隨聲逐響之儔,棄指歸而無執。"とある。文学批評史通史系列『魏晋南北朝文学批評史』第二編第二章四節四裴子野に詳論。

[25] 王勃(650-676):初唐の人。「上吏部裴侍郎啟」"自微言既絕,斯文不振,屈宋導澆源於前,馬張淫風於後。"原書第一篇第三章第三節三王勃(p102)参照

[26] 盧蔵用(?):「右拾遺陳子昂文集序」:"孔子歿二百而騒人作,於是婉麗浮侈之法行焉。"原書第一篇第三章第四節二(p122)参照。

[27] 張九齢:「陪王司馬宴王少府東閣序」:"致若詩有怨刺之作,騒有愁思之文,求之微言,匪云大雅。"

（「古風」の一）といったことがある。この後となると古文運動の先駆者となる、蕭穎士、李華、賈至、獨弧及、崔祐甫[28]、柳冕等がいる。これらの先駆者達は伝統観念に影響されており、機械的に文学を時代、政治と関係づけ、屈原、宋玉の文章が「哀しみ以て思う」の「亡国の声」であると考えた。また、それらが美の文学の始まりと考えたが、その一方、歴代の美の文学の発展となると、彼らから見れば、それは士人達が儒学を粗末に扱って、世の中に退廃が導かれる時の一つの現象に他ならないと考えるのである。この視点は、「宏道」以外の美の文学を排斥して、非常に狭隘なものであった。韓愈、柳宗元となるとこのような言論はない。

古文運動が大きな成果を挙げることができた理由は、韓愈、柳宗元などが文章の審美的能力を重視したことにこそ密接な関係があった。この重視が理論上に表れたのが、韓、柳ともに「奇」の字を強調した点である。

所謂「奇」とは、つまり一般とは違い、世間流俗より高く出ることである。奇を求めることは、すなわち平凡なものとは異なることを積極的に求めて、芸術上の独創と新変を追求することである。韓、柳以前の「古文」の先駆者と認められる作者達、たとえば元結[29]は、創作上においてはすでにかなり奇を求める傾向を持っていた。個別的な作品に至っては、たとえば独孤及が書いた「仙掌銘」[30]は当時の称賛を非常に博して、その文章もかなり奇であるといってよい。しかし、彼らはいずれも奇を尚ぶ主張を示したわけではなかった。韓、柳と同時代ながら、歳と世代が少し上の権徳輿[31]は、かつて「常をうまく使って、雅とし、故をうまく使って、新とする」（「醉説」）といったことがある。「新」の字をひねり出してはいるが、その重点は実は「常を使う」、「故を使う」の方面にあり、意味は故をもって新となして、熱心に新異を求めてはいけないということであった。彼から見れば、熱心に奇を求めるようなものは、すなわち「丸索を翫び、粔餌に躭る」の如く、雑芸を演じ、お菓子を好むようなもので、取るに足らない行為だ。

---

[28] 崔祐甫（721-780）：「穆氏四子講藝記」：“屈原、宋玉怨刺比興之詞，深而失中,近於子夏所謂「哀以思」。”原書第二編第四章第一節六（p461）参照
[29] 元結（719-772）：唐代古文の先駆者の一人。原書第二篇第三章第一節 p303 参照
[30] 「仙掌銘」：仙掌は華山仙人掌峰の略称。全唐文五百十八梁肅《常州刺史獨孤及集後序》：“於仙掌・函谷二銘,《延陵論》《八陣圖記》,見公識探神化,智合權道”とある。
[31] 権徳輿（759/761-818）：彼の父が古文系の李華・独孤及と交友があり、彼自身も独孤及に会っている。「醉説」：“苟未能朱紘大羹之遺音遺味,則當鐘磬在懸,牢醴列位,何遽翫丸索而耽粔餌。……酌古始而陋凡今,備文質之彬彬。善用常而為雅，善用故而為新。”原書第二篇第四章第二節二参照。（p473）

しかし、韓愈、柳宗元及び韓愈に従って古文を学んだ作者達は、ほとんど全く例外なく全て奇や新を標榜していた。韓愈は「大事にする物は、必ず普通の物ではない」、「自から独立して、よりかからない」(「答劉正夫書」) と繰り返して説き、「陳言を務めて去る」(「答李翊書」) ことを強調した。彼はしばしば「奇」、「怪」などの語を用い、自分の文章を「奇怪の辞」(「上宰相書」)、「瓌怪の言」(「上兵部李侍郎書」)、「怪怪奇奇」(「送窮書」)、「文章は奇抜であるが、実用にならない」(「進学解」) などと称した。柳宗元も同じように奇を尚んでいる。彼は韓愈の文章を称賛し「怪於文」(「讀韓愈所著<毛穎伝>後題」)、「恢奇」(「答韋珩示韓愈相推以文墨書」)、「文は益すます奇」(「先君石表先友記」) などの語を用いている。「(その文を読む時には) まるで龍や蛇を捕まえたり、虎や豹と闘対決するようで緊迫すること力較べをずっとし続けるようだ」(「讀韓愈所著<毛穎伝>後題」) などの有名な言葉は、すなわち奇怪な文章のもつ強烈な吸引力に対する彼の形容であった[32]。『国語』に対して、彼はその内容の「平凡で奇怪」を責めたけれども、またその芸術方面の「傑異」、「奇峻」(「非国語序」及び「後序」に見える) を賛美した。韓愈の門下生諸子の中で、沈亜之[33]、皇甫湜[34] が奇を尚んで怪を好んだことはよく知られている。しかし率直で平易だと知られている李翺[35] も、奇や新に反対したわけでなかった。彼の「答朱載言書」でははっきりと、文章はまさしくその工みを極めるべきだ、異を尚んで難を好む者は必ずしも平易を排斥する必要はなく、平易を主張する人も奇険を排斥すべきではないと述べている。彼は『六経』の文章の風格を称賛して、「潤いがあり不思議で美しい (津潤怪麗)」(「答朱載言書」に見える) の四字を使い、韓愈の文章を称賛して「構成は新鮮で驚かされる (開合怪駭)」(「祭吏部韓侍郎文」に見える) の言葉を用いたのである。彼は文章制作を論じるとき、同じように「創意造言は、皆な師とせず」(「答朱載言書」) を強調した。李翺は奇怪新創に対して、反対ではないのみならず、敬慕しているといってよい。まさにかかる理由で、裴度が彼を「文字表現への注目を意図とする」(「寄李翺書」) と批判することになったのだった[36]。これを要

---

[32] 柳宗元「讀韓愈所著毛穎伝後題」引用は“若捕龍蛇,博虎豹,急與之角而力不暇”なお、この後に“信韓子之怪于文也”と続く。“不暇”は通行本は“不敢暇”に作る。
[33] 沈亜之 (?-831 前後?) : 元和十年の進士。原書第二篇第四章第五節一に詳論。(p551)
[34] 皇甫湜 (?777-835) : 元和元年の進士。原書第二篇第四章第五節三に詳論。(p564)
[35] 李翺 (?774-?836) : 貞元十四年の進士。以下の彼の考えは原書第二篇第四章第五節二に掲載また詳論あり。(p557)
[36] 裴度 (765-839) : 貞元五年の進士。「寄李翺書」: “觀弟近日製作大旨,常以時世之文多偶對儷句,屬綴風雲,羈束聲韻,為文之病甚矣。故以雄詞致遠,一以矯之。則是以文字為意也。”

するに、奇変新創の強調は、古文運動の諸作者達の自覚的、共同的な理論の主張といえる。この点について、彼らはその先駆者から鮮明に区別されるのである。

このような主張は、古文運動が形成され発展した重要な原因である。駢儷文体の発展はすでに頂点に到っていたので、文章を愛好し、文才を自負する作者は、新境界を開拓するために、駢を散に変えないわけにはいかず、「古文」を「当時の文（時文）」に対立させなければならなかった。その上、心を込めて文章の芸術に気を配り、創作の技巧を高める必要があったのだ。所謂「古文」とは、実は新しく造られた文だったのである。すでに時代遅れの俗っぽい駢文に対していうなら一つの新たな創造であって、これは先秦漢代の文章に対してもそうであった。題材、表現範囲、芸術技巧、語言運用などの面において、「古文」は全て先秦漢代の文章より極めて大きな開拓と進歩がある。散文の文体に戻って来たけれども、決して単純な回帰ではなく、否定の否定の過程を経ることで、一つの新しい段階へと発展したのである。もし古文の書き手がこのような新しい芸術境界開拓への強い要求を持っていなかったならば、たとえ彼ら以前に蕭頴士、李華、獨弧及、梁肅などが復古を提唱し、駢儷文に反対しても、散文もただ平易で伝達にはありがたいものの、芸術力となると不足するレベルに留まるしかなかっただろう。奇を尚ぶ、新創を尚ぶ理論主張は、まさにこの新しい境地を開闢しようと努める意図の反映であった。この種の主張は、実はまた普遍で永遠の「新」「変」を求める審美心理の表現でもある。南朝の蕭子顯に「新らたな変化がなければ、秀でることはできない（若無新変、不能代雄）」（『南齊書』「文学傳論」）の語がある[37]。もしこれを借りてきて韓、柳など作者が「古文」を創作する動機の一側面を形容したとしても、できないわけではない。事実上、南朝の駢儷の風が盛んなときでも、少数の作者は故意に新を主張し、異を表し、頗る古の風格がある文章を書いた。たとえば、「文を為り古が甚だしい」王微（『宋書』「王微傳」）、自ら「文体英絶」と称した張融（『南齊書』「張融傳」）、「漢魏人の風格を見ると喜び、しばしば心でなぞりそれを追う」の江淹[38]も、彼らはみなそうであった[39]。もし美学的な心理からすれば、中唐古文家は正しく彼らと相通じるところがあっ

李翱とはいとこの関係。原書第二篇第四章第五節四にて詳論。（p572）

[37] 蕭子顯（?489-?537）：斉高帝蕭道成の孫。中国文学批評通史系列『魏晋南北朝文学批評史』第二編第二章第五節五にて詳論。

[38] 張融・江淹は『魏晋南北朝文学批評史』第二編第二章第四節にて詳論。

[39] 原注：銭鐘書『管錐編』第四冊、p1414 を参考。　訳注：銭鐘書『管錐編』第四冊、p1414：二〇八全梁文卷三八:江淹《詣建平王上書》。“按齊梁文士,取青妃白,駢四儷六,淹獨見漢魏人風格而悅之，時時心摹手追。……”銭鐘書（1910～1998）は現代の著名な学者

たのである。

古文家の主張した奇や新は、作品の思想の傾向についていうものではなく、芸術の表現についていうものだ。その内包は広い。韓愈によると、司馬相如、司馬遷、劉向、揚雄ら漢代の文章家達は全て「自から独立して、よりかからない」(「答劉正夫書」) 文によって自らを奇とした作者であり[40]、皇浦湜も「文學の繁栄は、屈原、宋玉、李斯、司馬遷、相如、揚雄らに及ぶものがなく、その文章は全て奇であり、それは皆遠くまで伝わっている」(「答李生第二書」) といっている[41]。これらの作者で、たとえば揚雄は言葉の晦渋で有名だったが、ただし他の人の言語の風格は一般的には奥僻ではなかった。所謂奇とは、要するに芸術の面の工夫が深く、成果が大きく、新頴独創のことをいうのであり、構想の立意、構成の手法、用語造句などの各方面を含んでいるのだ。しかし韓、柳などの人は、これに対して具体的に解釈し詳しく説明したことはない。一方、一般の作者となると、想像力や文章の開合変化の面に奇を求めることはやや難しいので、しばしば文章表現の面に奇を求めた。文章表現の領域でも、韓、柳のように独創的でありながら語法上の習慣に適う表現はこれまた難しいので、従って往々にして新語を無理に作って、晦渋に流れることになる。その一方、古文家の奇の強調は、時にはあまりにも度が過ぎてしまう。よって樊宗師のような文章は、当時では「苦渋」なもの (李肇『国史補』に見える[42]) としてよく知られながら、しかし韓愈はそれでもその文章の表現が適切であると賛美してしまった[43]。こうなると流弊が生じやすくなる。だが全体的にみて、利害得失を比較すれば、古文家が奇を求め、新を求める主張は、積極的なものであって、肯定すべきである。もしも、このような創作の心理や主張がなければ、古文運動は大きな成果を上げることは不可能であったのだ。

で、その著書『管錐編』は彼の読書ノートを集めたもの。扱われる問題は多岐にわたり資料の豊富さ考察の鋭さで知られる。

[40] 韓愈「答劉正夫書」"漢朝人莫不能爲文,獨司馬相如,太史公,劉向揚雄爲之最。然則用功深者,其収名也遠。……若聖人之道不用則已,用則必尚其能者。能者非他,能自樹立,不因循者是也。"

[41] 皇浦湜 (約777-約835) ：韓愈から墓誌銘制作を託された人物。「答李生書」："秦漢已來至今, 文學之盛, 莫如屈原、宋玉、李斯、司馬遷、相如、揚雄之徒。其文奇, 皆傳皆遠。"「答李生書」は三通残りその中の第二書。原書第二篇第四章第五節三にて詳論。(p564)

[42] 李肇『唐国史補』："元和以後,為文筆則學奇詭于韓愈,學苦澀于樊宗師,歌行則學流蕩于張籍,詩章則學矯激于孟郊,學淺切于白居易,學淫靡于元稹,俱名為元和體。"

[43] 樊宗師 (?766-824) ：韓愈による墓誌銘が残る。韓愈は「與袁相公書」で彼の文をほめ"又善爲文章,詞句刻深,獨迫古作者爲徒,不顧世俗輕重"。という。詩文の晦渋さで知られるが、元和以後文筆は苦渋を樊宗師に学ぶという状況が起きたこと、注 42)参照。

これを要するに、文章が実用に適うことを求め、文章が道を明らかにすることや奇や新を求めることを要求したこと、これが駢文が発達して中唐の「古文」に到った歴史の過程であり、文学理論批評の中の注意すべきいくつかの内容である。このような要求に実践が伴うことによって、駢体から散体に向かうという中国の文章の発展史上の大きな転換がようやく完成したのだった。

中唐の古文運動の先駆者達について、ここで補足しておきたいことがある。上述のように、彼らは美学的一面を軽視する傾向を多少持っていたが、美学的な分野でも注意すべき言論が全くないというわけではない。たとえば、梁肅、柳冕、権徳輿は文章の「気」の概念を提示している。彼らの所謂「気」は大抵文章の気勢、力量を指していっていることがわかる。韓愈はこの基礎の上に立って、気は盛んに言葉は適切であるべしという説を述べ、後世へ非常に深い影響を後世に与えたのだ[44]。「気」はわが国の古代の散文創作中の一つの重要な美学範疇になったのだといってよい。梁肅などの人が強調したのは、「道」は「気」よりも高位にあって、「気」を支配する側面を持つということだったが[45]、「気」そのものについては詳しく説明できなかった。しかし、古文運動の形成、発展の過程から見れば、つまるところ彼らが始めてこの概念を散文の創作の中に持ち込んでいたのだ。また、たとえばこれらの先駆者達の漢代の文章に対する評価はかなり高く、その中には審美の要素を含まれていた。独孤及は『荀子』、『孟子』の字句は質朴すぎ、理想とするに足りないが（この主張が正しいかどうかは暫しおく、『孟子』の字句の雄弁さや文勢はかなり芸術の力量を持っているからだ）、司馬遷、賈生、班固は深く手本とすることができるといっており[46]、その言葉は明らかに審美の角度からいったものである。彼らのいく人かは漢賦を否定し、極端な者たとえば柳冕は漢賦全てに「亡国の音」という劣悪な諡号を加えてすらもいる[47]。しかし、たとえば梁肅は、漢賦が「霸途から出る」、「その文章は雄大で豊かである」（「補闕李君前集序」）といっており、決

---

[44] 韓愈「答李翊書」：“氣，水也,言,浮物也。水大而物之浮者大小畢浮,氣之與言猶是也。氣盛則言之短長與聲之高下者皆宜。”
[45] 梁肅：「補缺李君前集序」：“故文本於道,失道則博之以氣,氣不足則飾之以辭。蓋道能兼氣,氣能兼辭,辭不當則文斯敗矣。”
[46] 梁肅「常州刺史獨孤及集後序」中の独孤及の発言に：“<荀><孟>朴而少文、屈、宋華而無根。有以取正、其賈生、史遷、班孟堅云爾。”
[47] 柳冕「謝杜相公論房杜二相書」：“至於屈、宋，哀而以思,流而不反,皆亡國之音也。至於西漢揚、馬以降，置其盛明之代,而習亡國之音,所失豈不大哉。”

して肯定の意味を持たないのではない[48]。権徳輿が漢賦を「広く大きくて麗しい」(「権公文集序」) と称するにいたっては、明らかにその意味は褒め称えるところにあった[49]。以上は「文」の範囲から述べたことだが、もしさらに先駆者の詩歌への言論について観察するならば、李華、独孤及、権徳輿などは、詩歌の持つ心身ともに楽しませ喜ばせる美的な功能を認めたことがある[50]。李華、権徳輿はかつて「楚辞」を「哀れで悲しくなり、元気は失せて返ることがないことができない」[51] (李華「崔沔集序」)、「学問の道が漸次衰退する」(権徳輿「崔元翰集序」) と批判したが、ある場合では、また「楚辞」の描き出した芸術世界が美しく人を感動させると称賛した[52]。このような現象は矛盾に見えるが、彼らの心の中では、おそらく道を伝える作 (主として「文」である) と楽しませて喜ばせる作 (主として詩である) を区別していたのである。屈原、宋玉の作は、彼らにとっては、政治教化の角度からいえば認める値打ちはないが、しかし美的角度からいえば認めてもよかったのだ。同じ事物でも、違う方面から見るなら、違う評価を与えられるものである。彼らの心の中では、決して矛盾するものではなかったのであろう。

---

48) 梁肅「補缺李君前集序」: "炎漢制度,以霸王道雜之,故其文亦二,賈生、馬遷、劉向、班固, 其文博厚,出於王風者也。枚叔、相如、揚雄、張衡、其文雄富、出於霸途者也。"

49) 権徳輿「權公(若訥)文集序」亦云: "漢興、劉向、賈誼論時政, 相如,子雲著賦頌,或閎侈巨麗, 或博厚遒雅。"

50) この三名の発言の例を挙げれば以下の通り。李華「送薛九遠遊序」: "心目所自,不忘乎賦情遣辭,取興茲境。當代文士,目為詩園。道在抑末敦元,可以扶教" 独孤及「唐故揚州慶雲寺律師一公塔銘序」: "(靈一)賦詩歌事,思入無間, 興含飛動。潘阮之遺韻, 江謝之闕文,公能綴之。" 権徳輿「送馬正字赴太原謁相國叔父序」: "(馬氏)每遇一勝境,得一佳句。則怡然獨哂, 若獲貴仕豐祿,恬於進趨"

51) 李華「崔沔集序」: "屈平、宋玉哀而傷, 靡而不返, 六經之道遁矣。"

52) 権徳輿「送張校書歸湖南序」: "亦將參質文於屈宋,詳歲時於荊楚。楓樹千里, 片帆鳥飛, 晨征夜泊,無非詩興。"